序

一九八四年。私は初めて自分自身の手で本を書いた。タイトルは『チームを創る』だった。次に書いたのがそれから八年後の一九九二年。タイトルは『続・チームを創る』だった。さらにそのすぐ後に最初の本に加筆して『チームを創る（改訂版）』と題し、三冊目を書いた。最初の二冊は東京の出版社から出したが、三冊目の『チームを創る（改訂版）』は自費出版で出した。

一冊目は、腎臓を悪くして長期入院していた時、空虚な時間が過ぎ去っていくのに耐えられなかったのと、「ひょっとしたらこれで俺のコーチ人生は終わりになるかもしれない」という思いから、あとに続く若い指導者たちの道しるべになるようなものを残しておきたいという気持ちが湧いてきて書いた。

その時点では二冊目を書くことになろうとは夢にも思っていなかった。が、結局二冊目を書いてしまった。きっかけは一九八六年の夏、名門鶴鳴を県大会の一回戦で負けさせてしまったからだった。どん底から這い上がるために自分自身が為したことを細かく書き残しておこうと思ったのがその発端だった。幸い、同時進行の自分史を書きながら五年後の一九九一年に再び悲願の全国優勝を果たしたのでそこでピリオドを打ち、二冊目の本を締めくくった。

ところがその本を読んだ何人もの人たちが、最初の本はどこの書店で売ってるのかとか、もう残っていないのかなどとしきりに尋ねてくる。それは絶版になって一冊も残っていなかった。だから私は最初の本に加筆した原稿を急いで書き上げ、それを改訂版として出せないかと出版社に尋ねた。出版社からは絶版になった本を再販することはないと断られた。そこで私はこの本を自費出版で出すことにした。

その時点ではもう書く材料もないし、書くための根気も続かないだろうと私は思っていた。しかし、一九九九年の二月下旬、エバンスビル大学の試合を見るために訪米した時、その気持ちは変わった。

エバンスビル大学では、鶴鳴の卒業生の大野慎子が選手として活躍している。私は慎子の活躍ぶりを見るためにアメリカに飛んだ。慎子は一九九六年、風軍団と呼ばれて日本のバスケットボール界を騒がせた鶴鳴女子高校の中心選手である。慎子はエバンスビル大学からの奨学金選手として勧誘され、高校卒業後渡米した。一年間の英語研修後正式に一年生として登録され、一九九八年の十一月から公式試合に出場している。慎子は最初からスタメンで起用され、日を追う毎にアメリカのスタイルに慣れ、日米両国のメディアに大きく取り上げられるほど活躍するようになっていた。しかし、私がこの『大野慎子物語』を書こうと思ったのは、そんな彼女の活躍ぶりを自慢したいからではない。彼女の生きる姿に感動したからである。

一九九九年二月二二日。その日、エバンスビル大学はロバートスタジアム（以下ロバーツと呼ぶ）でカンファレンスの首位をかけてクレイトン大学と午後四時半から試合をすることになっていた。その日慎子は八時から十一時まで授業だった。私は午前中ショッピングモールをぶらついた後、午後一時頃カーソンセンター（＝#四一　バスケットボール部がいつも練習する体育館＝以下カーソンと呼ぶ）に行った。駐車場の近くでアシスタントコーチのスウェンソンと会ったので私は聞いた。

「今日の練習は？」

「三時からロバーツでやるわよ」

「慎子はどこ？」

「ミーティングルームでビデオを見てるわ」

私はコーチのキャシーベネット（以下キャシーと呼ぶ）のオフィスの隣りのミーティングルームに行った。慎子は熱心にビデオを見ていた。

「何のビデオ？」

「昨日の練習のビデオです。できがよくなかったのでチェックしてるんです」
「ロバーツには何時頃行くの？」
「二時半頃です。友達のクルマで送ってもらいます」
「このビデオを見た後は？」
「寮に戻って一時間くらい明日の授業の予習をします」
私は、慎子の返事次第では食事にでも誘ってそれからクルマでロバーツまで送ってやろうかなと思っていた。しかしそれはやめた。軽い気持ちで声をかけるのが慎子のひたむきさと純粋さを崩してしまうような気がしたからである。
その日カンファレンスの首位をかけた重要な試合がある。その三時間前、ひとり一心にビデオで自分をチェックし、その後授業の予習をしてから慎子はスタジアムに向かうという。そのことばの背景には、ＴＯＥＦＬをクリヤーして正式入学を許可されたとはいえ、まだ英語がままならない日本の留学生がアメリカの大学で学問を学び、そしてディビジョンＩのバスケットボールに挑戦するのがどれほど大変なものであるかということが描かれている。しかし悲壮感はひとかけらもない。
学生だから勉強するのは当たり前。選手だからビデオを見て自分をチェックするのは当たり前。ただそれだけ。慎子にとってはごくごく当たり前のことなのである。誰に見せたいわけでもなく、誰に気に入られたいからでもない。ただひたすら、そうしたいと思ってそうしている慎子のひたむきさと純粋さに私は心を打たれた。
そして、「慎子の生き様は絶対に日本の選手たちに紹介しなければならない。そしてそれは私にしかできない仕事だ」と思った。その思いがもう一冊本を書く決心をさせた源流である。その源流が砂漠の中に吸い込まれる水無川になってしまうのか、或いはミシシッピー川のような大河になるのか、今はわからない。しかし、慎子が本場アメリカのバスケットボールに挑戦するに至った経緯と結末は、そのまま四年の歳月をかけた鶴鳴モーションバスケットの経緯と結末であり、それはなんとしてでも活字にして残しておかなければならないのである。なぜなら、慎子は日本全国どこにでもいる普通の選手であり、当時の鶴鳴のチームは日本全国どこにでもある普通のチームだったからだ。
慎子は高校一年生の時、高校総体のエントリーに入れず補助役員をしていた選手である。それが今、本場アメリカのディビジョンＩで活躍し、試合がある度に新聞に活字を踊らせている。しかもシーズン途中では週間ＭＶＰで表彰され、シーズン終了後は新人王までもらい、最後のカンファレンストーナメントではエバンスビル大学優勝の鍵をにぎる選手として活躍した上に、ベストファイブに選ばれてしまった。こんな選手が、自分の将来に悲観的になっている選手たちの道しるべにならないわけがない。
また、当時のチームは最終的には風軍団と呼ばれて注目され、インターハイでは決勝戦まで進出するチームに成長したが、準決勝と決勝の試合はスタメンの平均身長で八ないし一〇センチのハンディを負っての試合だった。それこそ、立っている姿だけなら全国どこにでもいる普通の選手が集まったチームだった。それが、試合が始まった途端に全員が風となってコート上を走り回るのである。そんなチームが、駒不足でチーム創りに悩んでいるコーチたちの道しるべにならないわけがない。
もう一度言う。私がこの本を書くのは、自分の教え子や自分のチーム創りの自慢話をしたいからではない。全国の悩める選手やコーチたちに、「がんばれ、人の業績というのは思いこめばきっとそこまでたどりつけるものなんだ」というメッセージを送ってやりたいからである。それ以上の望みは何もない。

平成十一年三月　　山崎純男

目次

第一章　HEART　OF　GOLD
一　EVANSVILLE
二　WILLIE
三　MISSOURI　VALLEY
四　TOEFL
五　OSHKOSH

第二章　前借り
一　前借り
二　スーパーシード
三　感染症
四　ストレス耐性
五　鶴鳴モーション
六　温存
七　寺平
八　金縛り
九　八四日
一〇　夏休み
十一　怪物退治
十二　総集編

第三章　デビュー
一　アブ
二　モップ係
三　元気印
四　駅伝
五　貧血
六　ドラウト
七　筋力トレーニング
八　らしさ
九　本番
一〇　デビュー
十一　アクシデント

第四章　風
一　副キャプテン
二　岡山
三　医科学測定

【平成七ー九年　慎子の渡米までの経緯】
カンファレンスや地域や学校の紹介
寮の仲間たちの紹介やジムでの自主トレのこと
所属カンファレンスのこと
英語研修のこと
キャシーとの出会い

【平成六年　慎子の入学以後半年間のできごと】
特待生の枠のこと
新人戦のこと
不安神経症の蔓延について
個人個人の精神的資質について
鶴鳴モーション発想のきっかけについて
県下春季選手権大会のこと
なんじゃもんじゃの木と寺平のこと
県下高校総体試合結果について
県下高校総体から選抜予選までのこと
夏休み特訓のこと
全国選抜大会県予選のこと
永田攻略に費やした三年間のこと

【平成七年　慎子、下積み時代終了】
遠距離志願者パイオニアの工藤洋子のこと
慎子、最初の試練
慎子、報告書で初めて活字になる
バスケット部大活躍の駅伝大会について
慎子、貧血のためしばらく休養
試合中に必ず訪れる得点停滞の時間帯について
九州高校春季選手権大会のこと
県下高校春季選手権大会のこと
県下高校総体のこと
九州高校総体で慎子いよいよ登場
鳥取インターハイのこと

【平成八年　風軍団の誕生から失速まで】
慎子、新チームの副キャプテン
九月の岡山講習会でのできごと
筋力トレーニングの成果について

四　ふくしま　ふくしま国体のこと
五　残留組　長崎地区新人戦のこと
六　再び駅伝　駅伝大会のこと
七　雨降って地固まる　県下新人戦のこと
八　失速　全国選抜大会のこと
九　追い込み　冬休みのこと
一〇　大雪　九州春季選手権大会のこと
十一　特訓　大滝と副田のこと
十二　赤字　県下春季選手権のこと
十三　ハナマル　県下高校総体のこと
十四　感動　山梨インターハイのこと
十五　沖縄　九州国体のこと
十六　三国対抗　八月下旬の日・中・韓親善試合のこと
十七　息切れ　全国選抜大会予選のこと
十八　満身創痍　広島国体のこと
十九　アンコール　全国選抜大会のこと
二〇　卒業旅行　沖縄派遣のこと

第五章　凱旋帰国　【平成十一年　慎子、二年ぶりの里帰り】
一　再会　一九九八の年夏休み、鶴鳴二回目のアメリカ遠征
二　キャンセル　慎子、二年二ケ月ぶりの帰国
三　振り袖　四ケ月遅れの成人式
四　開幕　一九九九ー二〇〇〇シーズン開幕のこと
五　iモード　慎子との連絡手段のこと